

生活在大陆

日笠完治

1993年3月2日上午10时登上了JAL781次班机。大约过了3个半小时，开始能看见中国大陆了。悠悠的长江、黄河以及辽阔的大地给人以超越时间的感觉。能碰到什么样的人，会有什么样的体验等着我，象小孩一样心中充满了希望。随着高度的降低，大地的颜色逐渐清晰。随处可见的土色给人以与欧洲不同的感觉。在飞舞的黄砂中安全到达北京首都机场。从前来迎接的小徐的聪明上，我第一次感受到了中国。

自那以后，已经2个月过去了。不寻常的景色也慢慢习惯了，从别的途径获得的有关中国的知识已经崩溃，通过自己的经验，形成了新的中国观或中国人观。这完全是以我个人的观点在我个人的经验上观念性地构筑起来的，谈不上什么科学性。下面是我从生活在大陆的人们风景中所产生的感想。

北京现在正处于市场经济的激流和作为体育外交顶峰的申办奥运的高潮中。早市、夜市、自由市场上活跃的气氛是中国无限的能量的光芒。高速公路的修整扩建、除了旧市区外的不断增加的中高层建筑、东单、西单、王府井等百货商店内丰富的商品，在这些情景中还能看到微笑以及对待他人稍为冷漠的表情。许多人希望自己能够不落伍于开始允许追求个人利益的政策。装作对世事莫不关心的骑自行车的人流、拥挤不堪的公共汽车的乘客都给人以都市的感觉。但我不明白一旦发生了什么事时所表现出来的赤裸裸的旺盛的好奇心是怎样产生的。买入场券时、乘公共汽车时、不顾信号过马路的行人、旁若无人地驾驶着的汽车，这种否定顺序或秩序的实力主义、自我中心主义是以什么样的精神构造为依据的呢？

要想在大陆生活，必须具备在大陆生活的条件。这些行为应该是建立在过去几千年来生活在大陆上的人们错误及教训的基础上的。有一定的合理性。从三轮车夫、民工、以及耕地的农夫的表情上，没有看破红尘者的悲观。在大陆生活，放弃是绝对不允许的。而且在许多民族、许多人共同生活的地方，若不留心日常生活中细小的变化，就会蒙受损失。社会生活的基准是自己的问题自己解决，不企求他人的帮助。微笑是为了不树敌，疏远意味着防御。能够依靠的是家人和亲戚，只有血缘可以相信。生活在中国大陆，就意味着做到彻底的个人主义。

任期的一半过去了，再有不足2个月就不得不回日本。在不同文化的国度里探索人类智慧意义的喜悦仍在继续。恐怕我会喜欢上中国。与日本研究中心中日双方教职员的交流、与所教学生的畅谈、与别的专业及教师进修班学生、在友谊宾馆里相识的人们的为数不多的交往，都是我的财富。我要珍惜这些财富，在所剩不多的任期内尽最大的可能作出贡献。

图书馆通讯

“中心”自去年以来开展了请国内外从事日本学研究的人士向“中心”图书馆赠书的活动。图书馆规定：①对捐赠的图书一律统一盖章署名以作永久纪念。②对赠书者各发给“特别借书证”一张，可以优先使用本“中心”图书资料。③回赠“中心”资料。④对赠书50册以上者，另发纪念奖状和奖品。⑤对大量赠书者，将另设立纪念专栏。目前图书馆已收到赠书352册，赠书最多的是“中心”主任代理李书成先生，达125册，其中中文图书80册，价值160多元，日文图书34册，价值66000日元，香港中文图书11册，价值290港币。图书馆衷心地感谢慷慨捐赠的各位朋友，并欢迎“中心”教师、毕业生及广大同学向图书馆赠书。对捐送来的图书资料将全部编目入库，并面向全国开放。其他赠书10册以上的名单如下：

尾上兼英（31册）、佐藤保（31册）、犬饲公之（28册）、天野幸一（26册）

坂崎信夫（26册）、有末贤（14册）、池田温（10册）

【研究室活动】社会研究室和语言研究室将分别于5月28日（社会）和6月11日（语言）举行研究会，有周维宏的「中日农村工业化比较」（社会）、神野藤昭夫的「关于物语中的（ヤッル）和（ヤツス）」、朱京伟的「关于现代汉语中的日语借词」（语言）的研究发表。

[ニュース]

- ◇公開講座：4月22日、29日、5月13日の各木曜日、恒例の公開講座が開催された。講演者と演題は以下の通り：石井久雄「虚構の言語」、上垣外憲一「日中の架け橋としての朝鮮半島」、神野藤昭夫「文学史として読む百人一首」。
- ◇專題講座：4月23日、5月7日の各金曜日、センターの電教室にて專題講座が行われた。客員教授の劉耀武氏と、センター教員の周維宏氏よりそれぞれ「日本語の接続詞を論ずる」、「西方文化の日本への影響」と題する講演があった。

☆ シンポジウム開催される ☆

5月21日(金)、22日(土)の2日間、第5回日本学中日シンポジウム(青年シンポジウム)が盛大に開催された。中国各地より参加した37名の代表を始め、国家教育委員会、中日二十一世紀委員会、北京大学現代日本研究センター、報道機関等からの来賓、北京外国語学院の関係者、そして日本人専門家、学生など合わせて総勢120名がこのシンポジウムに参加した。

☆特別講演

5月21日(金)の特別講演においては、北京外国語学院日本語学部長嚴安生教授による「清末の日本留学生にみられる“同床異夢”の構図について」と題する講演と、慶應義塾大学の富永健一教授の「経済発展の社会文化的多様性とアジア」と題する講演があった。嚴安生教授からは清末留学生が日本留学で味わった精神的苦悩の過程が詳細に明らかにされ、今後中日両国関係を構築していくための鋭い示唆があった。また富永健一教授からは、従来の中日両国の近代化のプロセスが、儒教文化というコンテクストにもとづいて分析されるとともに、今後のアジア地域の経済的発展について明るい希望が語られた。

☆分科会報告とシンポジウム

5月21日(金)午後と22日(土)の両日、言語、文学、社会、文化の4つの分科会に別れて、報告とシンポジウムが行われた。言語分科会では、参加者の多くが現職の日本語の教員であるため、言語の理論と教育の実践を結びつけた発表が目立った。文学分科会では、日本文学上の精緻な問題について、中国人の視点から果敢に取り組む姿勢が見られた。社会分科会では、日本の経済的発展の過程と中国の現代化の問題とが比較して論じられ、躍進著しい今日の中国社会にとって有益な議論があった。また文化分科会においては、中国各地域の図書館から多くの参加者があり、これらの図書資料に関する比較研究は、センターの研究分野の新たな広がりを示すものと評価できる。(以下代表名簿)

<p>言語：郭勝華 北京大学東方語言系 朱新華 南京大学外文系 朴正龍 東北電力学院日語教研室 韓麗娟 首都師範大学外国語学院 傅 静 西南交通大学外語系 劉麗華 吉林工業大学 王 禾 中国医科大学日語教研室 高 寧 南開大学外文系 李丹明 首都師範大学外国語学院 譙 燕 北京日本学研究中心 侯仁鋒 西安第4軍医大学外語教研室</p>	<p>文学：張龍妹 北京日本学研究中心 周 建 華中理工大学外語系 邱 嶺 福建師範大学外語系 王宝平 杭州大学日本文化研究中心 顧也力 広州外語学院東語系 張明傑 对外經濟貿易大学对外貿易外語系 李 強 北京大学東方語言系 胡令遠 復旦大学日本研究中心</p>
<p>社会：宋金文 北京日本学研究中心 楊 珍 北京語言学院 張競賢 重慶建築工程学院 孔繁志 首都師範大学外国語学院 劉樹仁 吉林大学外文系 邓仕超 山西大学日語教研室 孟 薇 天津市現代日本文化研究所 丁宏偉 北京外国語学院日語系 徐向東 北京日本学研究中心</p>	<p>文化：趙紅川 重慶市北碚図書館 林子雄 広東省中山図書館特蔵部 王 若 大連図書館 李国慶 天津図書館歴史文献部 肖伝国 洛陽外国語学院 範 苓 遼寧省委党校文史教研室 李濯凡 首都師範大学外国語学院 劉林利 北京第二外国語学院日語系 李筱平 吉林師範学院大学外語部</p>

1993年3月2日午前10時成田発のJAL781便に搭乗した。3時間半ほど経たとき、眼下に中国大陸を見ることができた。ゆったりと流れる長江そして黄河、広がる大地は、時を超越したかのように感じられた。これから、どんな人と出会えるのか、どんな体験が待っているのか。小児の如く希望に胸を膨らませた。高度を下げるに従い、大地の色が鮮明になってくる。土色の多さにヨーロッパとの違いを感じた。舞い立つ黄砂のなか、北京首都空港に無事到着した。出迎えに来てくれた徐さんの聡明さに初めての中国を感じた。

あれから、既に2ヵ月が経過した。非日常的であった風景も徐々に日常化していく、他から得てきた中国に関する知識は崩壊し、自分のなかで自分なりの体験を通して、新たな中国像ないしは中国人像が作られ始めた。あくまでも、個人的体験を個人的観点から観念的に構築することであって、もとより科学性はない。思いつくままに、大陸に生きる人々の風景から思考を巡らしてみたい。

北京は、今、社会主義市場経済の激流およびスポーツ外交の頂点であるオリンピック誘致運動の渦中にある。朝市、夜市、自由市場にみられる活気は、中国の無限のエネルギーの光芒である。高速道路の整備拡充、旧市街の外に広がり始めた中高層ないし超高層建築の林立、東単、西単、王府井などのデパートに溢れる品物、それらの情景のなかに笑顔と共に他人に対する少し冷めた表情を見ることが出来る。多くの人の心が、個人の利益追求を許し始めた政策に、乗り遅れまいとする。無関心を装いながら乗る通勤時の自転車の激流、溢れんばかりのバスの乗客、そこに都会を感じつつも、一旦ことがあると剥き出しになる好奇心の旺盛さはどこから生まれるのか。入場券を求めるとき、バスに乗るとき、信号を無視して道路を渡る歩行者、傍若無人とも思える車の運転、このような順序ないし秩序を否定する実力主義、自己中心主義は、どのような精神構造に依拠するのか。

大陸に生きるためには、大陸に生きる条件を備えなくてはならない、これらの行動は、過去数千年間にわたって、大陸に生きた人々の試行錯誤と反省に基づく結果としての行動であるはずだ。それなりの合理的理由がある。そう思うと、道でリヤカーを引く人の顔、人夫仕事をする人の顔、田畑を耕す人の顔に、諦観を感じる事が出来ない。大陸に生きるためには、決して諦めは禁物である。また、多くの民族、多くの人々が同時に存在するところでは、日常と少しでも相違があることに細心の注意をしなければ、利を失し害を被ることになる。社会生活の基本は、自分のことは自分で処理することであって、他者の助けを考えない。ほほ笑みは敵をつくらず、疎遠は防御を意味する。頼みは家族や親戚であり、血を信じるしかない。中国大陸に生きるとは、個人主義に徹することだと思ふ。

任期の半分を過ぎ、後2ヵ月足らずで日本に帰らなければならないが、異文化のなかで人間の知恵の意味を探る喜びはまだまだ続く。中国が大好きになってしまいそうである。日本学研究中心の日中双方のスタッフとの交流、担当する学生との語り、担当外であるが他コースの学生ないし研修教師の方々、友誼賓館で知り合いになった人々との数少ない出会いは、私の宝である。その宝を大切に残りの任期に全力で可能な限りの貢献ができれば幸いである。

＜ 図書館通信 ＞

北京日本学研究中心は、昨年度より国内外で日本学研究に携わっている方々から図書の寄贈を求めている。図書資料館の規定によれば：①寄贈図書には一律に統一した印と署名をして永久に記念とする。②図書を寄贈した方には『特別貸出証』を発行し、センターの図書資料が優先的に使えるようにする。また③センターの資料を贈呈する。④50冊以上寄贈した方には、他に記念の賞状と賞品を送る。⑤大量に寄贈のあった方には記念図書コーナーを設ける。目下のところ図書館には352冊の寄贈図書が収められている。寄贈図書が最も多かったのはセンター主任代理の李書成先生で、125冊に上っている。その中の中国語図書80冊は160円の価値があり、日本語図書34冊は66000円の価値がある。香港中国語図書11冊は290香港ドルに値する。図書館は惜しみなく図書を寄贈して下さった方々に心からの感謝を申し上げる。また併せてセンターの教員、卒業生および多くの学生諸氏が図書を寄贈して下さることを歓迎する。寄贈された図書は目録作成のために書庫に入れられたあとで、全国に開放する。今までに10冊以上の寄贈のあった方々の名簿は以下の通りである。

尾上兼英(31冊)・佐藤 保(31冊)・犬飼公之(28冊)・天野幸一(26冊)・篠崎信夫(26冊)
有末 賢(14冊)・池田 温(10冊)

【研究室活動】社会研究室と言語研究室はそれぞれ5月28日(社会)と6月1日(言語)に研究会を開催する。周維宏氏の「中日農村工業化の比較」(社会)、神野藤昭夫教授の「物語中の『ヤツル』と『ヤツル』について」、朱京偉氏の「現代中国語における日本語の借用語について」(言語)の研究発表がある。